

# 日本語教員養成向け e ラーニングコンテンツの 開発と授業実践および授業評価

## —日本語教員養成向け

## ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて—

篠 崎 大 司

### 【要 旨】

本稿は、日本語教員養成向けブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて、日本語教育能力検定試験に準拠した e ラーニングコンテンツを開発するとともに、その授業実践で得た受講生による授業評価の結果から、その有効性について検証するものである。アンケート調査の結果、すべての質問項目において大学総計を上回り、日本語教員養成科目においても、e ラーニングの導入が満足度の高い授業を提供しうるものであることが示された。

### 【キーワード】

ブレンディッドラーニング, Moodle, 日本語教員養成, 日本語教育能力検定試験

## 1. はじめに

本稿は、ブレンディッドラーニングモデル（以下、BL モデル）の構築に向け、日本語教員養成向け e ラーニングコンテンツを構築するとともに、その実践によって得られた受講生による授業評価の結果から、その有効性を検証しようとするものである。

BL とは、従来行われてきた対面式授業（オフライン教育）に e ラーニング（オンライン教育）を融合した授業モデルである。オンライン教育とオフライン教育双方のメリットを活かしつつ、教育効果を高め、また学習意欲に寄与する授業モデルとして、近年注目されている。

筆者はこれまで大学において「日本語教育概論 1・2」を担当し、日本語教育能力検定試験の出題範囲に沿って授業を行ってきた。しかしながら、日本語教育能力検定試験の出題範囲は極めて多岐にわたり、教員による口頭での解説を主とした一方向的な対面式授業では、限られたコマ数の中で提供できる知識量に限界がある。また、必要な知識の提供に徹すれば、いきおい受講生の理解度への配慮は二の次になってしまい、学習効果や学習満足度の向上が望めないばかりか、ドロップアウトを引き起こす原因ともなりかねない。

そこで、本研究では十分な知識量を提供するとともに、自律的な学習を促すような学習環境の実現のため、日本語教員養成向け BL モデルの構築をめざし、e ラーニングコンテンツを Moodle 上に開発、授業実践で得た学習者による授業評価の結果から、その有効性について検証した。

## 2. 先行研究

BL は、従来の対面式授業やeラーニングの次代を担う新たな授業モデルとして近年注目されており、企業研修や情報教育、医療、学校教育など、様々な分野でコンテンツ開発が進められ実践報告がなされている (Bersin (2004)、中尾他 (2005)、宮地他 (2009) など)。

例えば、宮地他 (2009) はBL が学習に与える効果として以下の4点をあげている。

- (1) (1) 学習者の孤立を防ぎ、落ちこぼれを食い止められる。
- (2) 学習意欲を高める。
- (3) 学習効果を高める。
- (4) 効果的な学習の分業が期待できる。(pp. 96-99)

とりわけ(1)は、従来のeラーニングの問題点であった高いドロップアウト率を抑制できる、BLの大きな強みといえる。また、(4)で指摘している通り、例えば、新たな知識の獲得や暗記学習は、オンライン教育によってあらかじめプログラミングされた教育を学習者全員にかつ各自のペースで徹底的に行い、協働学習や体験型学習など、手続き的知識の獲得や創造性の発揮が求められる学習はオフライン教育で行うといったようにすれば、質の高い教育を提供できるだけでなく、学習の一部をeラーニングに担わせることによって、教師の授業負担を軽減することもできる。

日本語教育におけるBL研究としては、池田 (2010)、安藤 (2011)、池田・深田 (2012)、藤本 (2008) (2009) (2011) (2012)、藤本・武田・長崎 (2011)、篠崎 (2009) (2010a) (2010b) (2011a) (2011b) (2011c) がある。

例えば、藤本 (2008) (2009) (2011) (2012) は、日本と台湾・インド間でweb会議システムを使った初級日本語BLによる授業の実践報告を行っている。また、池田 (2010) は、同じく初級日本語学習者を対象としたBLによる授業を実践し、その有効性を検証している。さらに、篠崎 (2009) (2010a) (2010b) (2011a) (2011b) (2011c) では、上級日本語学習者を対象にBLによる授業を実践し、その有効性を検証している。

一方、日本語教師養成の分野においては、BLあるいはeラーニングを活用した授業実践の報告は見当たらない。

## 3. 本研究の目的

BLモデルの構築に向け、以下の2点を本研究の目的とする。

- (2) (1)日本語教員養成に特化したBLモデルの枠組みを構築し、それに基づいて日本語教育能力検定試験出題範囲の約半分(「言語一般」と「言語と教育」の一部)を扱ったeラーニングコンテンツを開発する。
- (2)開発したコンテンツを使って授業を実践し、学生による評価によってその有効性を検証するとともに今後の課題を明らかにする。

#### 4. BL モデルの枠組み

本コースにおける BL モデルのオンライン教育とオフライン教育の配合具合は、以下の通りである。

- (3) (1)オンライン教育 (e ラーニング) : 講義資料の提供、チェックテストの実施とデータ管理、課題提出窓口
- (2)オフライン教育 (教師) : 個別指導、サブコンテンツの紹介、学習状況・課題の確認とフィードバック、出席管理、成績評価

#### 5. コース概要

##### 5-1. コース概要

コースの概要は以下のとおりである。

- (4) (1)対 象: 「日本語教育概論 1」(注 1) 受講生。ただし、留学生にあつては、日本語能力試験 N1 合格を受講条件としている。
- (2)目 標: 日本語教育能力検定試験出題範囲のうち「言語一般」と「言語と教育」の一部に関する知識の習得。
- (3)授 業: PC 教室による一斉授業。
- (4)シラバス: 図 1 参照。
- (5)教 材: 毎回講義資料に準拠した資料を配布。

1 章	オリエンテーション
2 章	言語の種類／世界の諸言語 ／一般言語学
3 章	日本語の構造
4 章	音声・音韻体系
5 章	形態・語彙体系 (1)
6 章	形態・語彙体系 (2)
7 章	文法体系 (1)
8 章	文法体系 (2)
9 章	文字と表記
10章	意味体系／語用論的規範／日本語史
11章	実践的知識・能力 (1)
12章	実践的知識・能力 (2)
13章	語学教授法の変遷
14章	評価法

図 1 シラバス

##### 5-2. コンテンツ概要

コンテンツは別府大学が運営する Moodle 上にコースを立ち上げ構築した。コンテンツの内容は、受講生にとって必須タスクであるメインコンテンツと、授業中あるいは授業後に任意にアクセスできるサブコンテンツからなる。

メインコンテンツでは、日本語教育学に関する知識の提供とその定着を主要な目的としている。1 回分の構成は①講義資料の提供、②10分10問チェックテスト、③課題となっており、それぞれが出席率や評価と連動している。

サブコンテンツでは、メインコンテンツや日本語教育全般に関する興味の喚起、学習のテーマに対する理解の深化を目的に、日本語教育に関するサイトや動画を紹介するコーナーと、「IT を使い倒せ!!」と題して授業で即利用できるサイトや動画を紹介したコーナーを設けている (図 2 参照)。



図 2 1 章分のコンテンツ

### 5-3. 授業の進め方

授業が始まる直前に、筆者がMoodle上に構築したeラーニングコースの該当の章を受講生がアクセスできる状態にする。

授業開始と同時に出席を取った後（出席確認でポイント1）、日本語教育で重要な専門用語（以下、キーワード）が空欄になった紙媒体の講義資料を授業ごとに配布する。講義資料はパワーポイントで50枚から100枚程度のもので（コース全体では945枚配布）、例えば、「1章 言語の構造一般（1）」であれば、「言語の種類」「言語の系統概説」「世界の諸言語（1）」「世界の諸言語（2）」「一般言語学」の項目ごとに17枚～19枚、計90枚の講義資料を配布する。

受講生は、授業が始まると同時にMoodle上のeラーニングコースにアクセスする。コース上には、受講生に配布した講義資料にキーワードの明記されたものがPDFでアップされており、受講生は該当部分のコンテンツを開け、それを読みながら随時手元の講義資料にキーワードを埋めていくことによって学習を進めていく（図3参照）。その間、教師は机間巡視をしながら質問に答えたり、補足説明を行ったりする。

しかしながら、この作業を90分間続けると、学習が単調になるため、学習効率や集中力、学習意欲の低下、ひいては授業そのものに対する評価の低下を招いてしまう。また、学習内容の理解を図ったりあるいはさらなる

広がりを持たせるためには、講義資料といった文字情報による提示だけでなく、例えば、動画サイト上にアップされている発声時における声帯振動の様子を紹介する等、オンライン環境の特性を生かしたメディアリッチなコンテンツを提供することが効果的である。そこで、授業のはじめあるいは半ばに、日本語教育に関する興味や最新情報の提供あるいは気分転換などを目的に、筆者が日本語教育に関するサイトや動画コンテンツを5分から10分程度紹介する（図4参照）。その後、受講生は再び図3で示したような学習に戻る。

講義資料を各自のペースで通読した後、受講生は知識の確認と定着を図るための「10分10問チェックテスト」を各自で行う（図5参照）。これは、講義資料に出てくるキーワードを問う記述式の問題で、制限時間10分で10問出題される。出題される問題は、例えば以下のようなものである。



図3 学習の様子



図4 サブコンテンツの紹介



図5 10分10問チェックテスト

(5) ( ) に入る言葉を入れなさい。

言語は伝えたい情報を一度に相手に送ることはできず、文という手段によって芋づる式に相手に情報を伝達します。これを言語の ( ) といいます。(答え：線条性)

解答は、講義資料を見ながら行ってもよいものとし、授業のあった日の夜12時までに完了すると出席ポイント1が付与される。

授業終了後、学習内容の更なる理解の深化を目的に、受講生は授業のあった次の週の水曜日17:00までに授業内容と関連のある図書を各自で選んで読み、Moodle上の所定の窓口から400字程度のレポートを提出する。教師は、課題提出状況確認画面を通じて課題内容を確認し、コメントをフィードバックする(図6参照)。締め切りまでにレポートを提出すると、出席ポイント1が付与される。

従って、授業1回あたりの出席ポイントは計3ポイントとなる。なお、提出に間に合わなかった場合は、自動的に本授業を放棄したものとみなされる。



図6 課題提出状況確認画面  
(なお、一部画像処理をしている。)

#### 5-4. 評価方法

授業評価は、5-3で定めた出席ポイントで80%以上取得し、「10分10問 チェックテスト」および授業ごとに課せられる課題をすべて完了した受講生を対象に、期末レポートによって評価する。

### 6. 授業実施と有効性の検証

#### 6-1. 授業実施

以下の要領で授業を実施した。

- (1)期 間：2012年度前期（4月12日～7月26日）
- (2)受講生：10名（うち、日本8名、中国2名）。
- (3)授業形態：PC教室での一斉授業。

#### 6-2. 受講生による授業評価と考察

コースが終了した時点で、受講生による授業評価アンケートを実施した。質問項目は14で、評価は「強くそう思う」「そう思う」「どちらともいえない」「そう思わない」「全くそう思わない」の5段階評価、さらに「強くそう思う」を5ポイント、「全くそう思わない」を1ポイントとして平均を求めた(注2)。回答数は10であった。なお、本稿では、別府大学全専任教員を対象に同時期同形式で行われたアンケート調査結果(以下、全体総計)と比較しながら、考察を進めることにする。

まず、質問項目1①～1④は受講生自身に対するもので、この項目に対する回答から受講生の授業に対する積極性や自律性、学習意欲の程度を読み取ることができる。図7に示した結果をみると、総じて全体総計を上回っており、本授業で実践したBLモデルが受講生の学習意欲の向上や授業に対する積極的な取り組みに寄与したことが窺われる。

本授業では、授業の出席状況、「10分10問チェックテスト」、さらには授業後の課題の提出が期末レポートの提出条件に連動していること、それらの状況を受講生全員に公開し「見える化」することで常に意識させること、教師の一方的な講義ではなく自らの力で課題を遂行することで学習が進むスタイルをとることによって自律的学習を促したことが、特に1①、1③の項目に大きく貢献したと思われる。

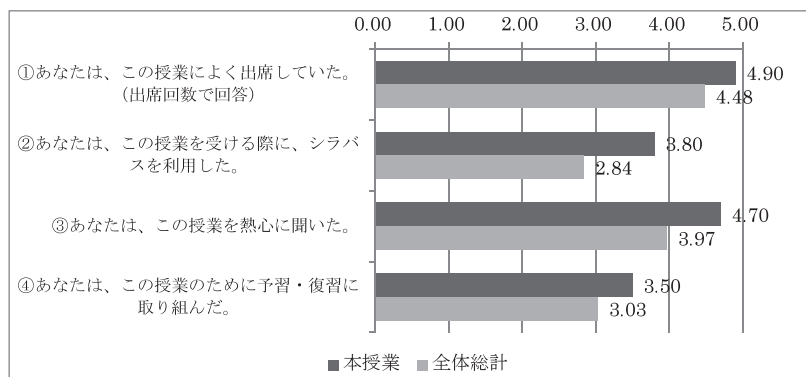


図7 1 この授業科目におけるあなた自身のことについて回答してください。

1②については、シラバスはすべてネット上に公開されており、受講の際には学生が受講前にあらかじめ閲覧し内容を確認することになっているが、必ずしもそれが徹底されているとは言えない。本授業においては、ネット上のシラバスを本授業用サイトからリンクするとともに、1回目のオリエンテーションの際にそれをもとに授業の概要説明を行っている。大学総計に比べて高い数値を示しているのは、そのためと思われる。

1④については、本授業では授業開始と同時にeラーニングコンテンツの該当部分をアクセスできるようにし、講義資料を配布するところから学習が開始するスタイルをとっており、特に予習は課していない。一方、復習については、授業後、「課題」として毎回授業と関連のある書籍の読後感想文(レポート)の提出を課しているが、これは復習というよりはむしろ発展学習という位置づけである。このコンテンツを従来のままにするのか、あるいは復習という位置づけにして、例えば、授業で扱った内容を日本語教育能力検定試験の出題形式と同じ選択問題形式の問題コンテンツを新たに追加するかについては、今後さらに検討を要する。

続いて質問項目2①～2⑩は、この授業に対するもので、より具体的な授業改善に関する情報を提供してくれる。図8に示した結果をみると、先述の質問項目1と同様、総じて全体総計を上回っており、本授業で実践したBLモデルが、受講生にとって満足度の高い授業モデルであるということを示しているといえる。

2①については、シラバスには授業の目的・評価方法を示しているものの、内容については各回の授業タイトルを示しているのみである。本授業が採用しているBLは、まだ一般的なものではない。そうした授業スタイルや、あるいは授業時に配布される講義資料の量の多さに戸惑った受講生も少なくなかったと思われる。

2②については、各回で用意している学習コンテンツは概ね80分から90分程度の学習で完了する程度の量を用意しており、受講生自らが主体的に学習を進めなければ授業時間内に完了できないようになっている。つまり、授業の進捗は基本的には受講生自身の学習スピードに委ねられているわけである。従って、主体的な学びを志向する受講生にとっては適した授業スタイルであるが、受身的な学習を志向する学習者にとっては授業進捗が早く負担であると感じる授業スタイル

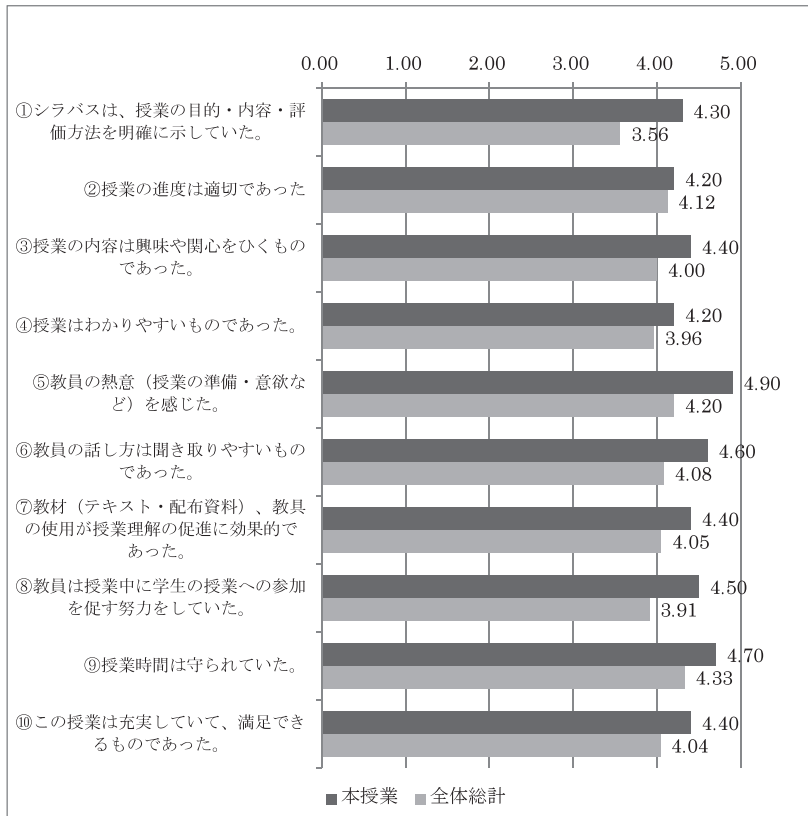


図8 2 この授業についてあなたがどのように感じているのか回答して下さい。

であったのではないかと推測される。

2③については、別府大学は日本語教育学を主専攻に持っていないこと（注3）、また本授業が日本語教師を目指さない学生も受講可能であることを考慮すれば、本授業が日本語教育学に対する受講生の興味や関心を高めることに貢献したといえるのではないと思われる。今後は、日本語の授業の様子を動画で紹介したり、日本語教育に関する最新の情報を提供したりすることによって、さらなる興味や関心の喚起に努めていきたい。

2④については、メインコンテンツの柱である講義資料の内容が、受講生にとって理解しやすいものであったことが、このような評価につながったと考えられる。授業内容の中には、これまでの学校教育では触れられていない日本語学的知識や、文系の学生には比較的難度が高いと思われる評価法（テスト結果の処理）なども含まれている。従って、今後は記述内容の修正や新項目の追加など、講義資料をさらに充実させていくことによって改善していきたいと考える。

2⑤～⑦については、毎回配布する講義資料や授業中筆者が行うサブコンテンツの紹介、さらに課題に対するフィードバックなどが奏功したと思われる。

2⑧については、授業出席、10分10問チェックテスト、授業後の課題をすべて出席ポイントとして評価に連動させたこと、また、授業中机間巡視をしながら受講生とこまめにコミュニケーションを取ったことがこのような結果につながったと思われる。

2⑨については、学習内容をすべてeコンテンツ化し Moodle 上で提供することによって、授

業中にこなせなかった内容については自宅でも学習できるようになった。こうした仕組みを確立したことで、授業時間に縛られることなく授業を展開できるようになったことが、高い評価につながったと思われる。

2⑩は、いわば本授業に対する総合評価ということができる。今回4.40という評価であったが、これまで述べてきた改善策を確実に実行することによって、さらに高い評価を目指していきたい。

## 7. おわりに

筆者はこれまで、日本語学習者を対象としたBLを実践してきたが、日本語教員養成科目においても受講生から高い評価を得る授業モデルであることが、今回の評価アンケートで示された。

従来の日本語教員養成の研究においては、実習に関するものが大半であった。しかしながら、実習活動をより多量にするためには、それを下支えする十分な知識、言い換えれば日本語教育能力検定試験の出題範囲に示される広範な知識が必要である。また、「日本語教育概論」という科目は、日本語教師を目指す学生の多くが最初に受講する科目でもあり、これによって日本語教育学に対するイメージが形作られるといっても過言ではないだろう。従って、基礎教育である概論の授業をいかに効率的かつ魅力的なものにするかということは、教員養成においても重要な課題であると考えている。その意味で本研究の意義は大きい。

最後に、今後の課題として、1.日本語教員養成に特化したBLモデルの構築、2.eラーニングコンテンツのさらなる開発、3.教育効果の測定、の3点をあげておきたい。これらを今後の課題としながら、BLモデルのさらなる実践研究を進めていきたい。

注：

(注1) 後期には「日本語教育概論2」が開講されており、この両科目で日本語教育学の概要すなわち日本語教育能力検定試験の出題範囲をほぼ網羅する内容となっている。

(注2) ただし、質問項目1①については、「14回以上」「12~13回」「10回~11回」「9回」「8回以下」で回答を求めた。

(注3) ただし、文学部国際言語文化学科に所属する学生を対象に「日本語教員養成課程」を開講しており、本授業もその授業科目に含まれている。

## 引用文献・参考文献一覧

安藤淑子 (2011) 「ブラジル人学校と大学を結んだ遠隔日本語教育：初級学習者に対するブレンディッドラーニングの試み」『山梨国際研究：山梨県立大学国際政策学部紀要』6 pp.51-60

池田伸子 (2010) 「ブレンディッドラーニング環境におけるeラーニングシステム利用の効果に関する研究」『ことば・文化・コミュニケーション』2 pp.1-12

池田順子・深田淳 (2012) 「Speak Everywhere を統合したスピーキング重視のコース設計と実践」日本語教育学会『日本語教育』152号 pp.46-60

大木充・田地野彰・浅田健太郎 (2003) 「自律学習と学習者の動機づけに対するCALLの有効性—自律学習支援環境の構築に向けて—」日本フランス語教育学会『フランス語教育』32号 pp.87-100

篠崎大司 (2012) 「新しい日本語能力試験に対応した上級日本語聴解eラーニングコンテンツの開発—ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて」日本語教育方法研究会『日本語教育方法研究会会誌』Vol.19 No.2 pp.52-53

篠崎大司 (2011a) 「Moodle を活用したブレンディッドラーニング授業モデルの構築とその有効性—上級日本語文



- 法 BL モデルの再改良と教育効果－」日本語教育方法研究会『日本語教育方法研究会会誌』Vol. 18 No. 2 pp. 8－9
- 篠崎大司 (2011b) 「Moodle を活用したブレンディッドラーニング授業モデルの構築とその有効性－上級日本語文法 BL モデルの改良－」日本語教育方法研究会『日本語教育方法研究会会誌』Vol. 18 No. 1 pp. 2－3
- 篠崎大司 (2011c) 「Moodle を活用したブレンディッドラーニング授業モデルの構築とその有効性－上級日本語文法を中心に－」別府大学『別府大学紀要』第52号 pp. 1－10
- 篠崎大司 (2010a) 「Moodle を活用したブレンディッドラーニング授業モデルの構築とその有効性－上級日本語読解 BL モデルの改良－」日本語教育方法研究会『日本語教育方法研究会会誌』Vol. 17 No. 2 pp. 22－23
- 篠崎大司 (2010b) 「Moodle を活用した上級日本語聴解 e ラーニングコンテンツの開発と学習者評価－ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて－」別府大学『別府大学紀要』第51号 pp. 21－34
- 篠崎大司 (2009) 「Moodle を活用した上級日本語読解 e ラーニングコンテンツの開発と学習者評価－ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて－」別府大学国語国文学会『別府大学国語国文学』第51号 pp. 1－26
- 中尾茂子・安達一寿・北原俊一・新行内康慈・井口磯夫・綿井雅康・橋本健志 (2005) 「ブレンディング型授業形態の類型による教材開発と授業実践」『日本教育情報学会年會論文集』21 pp. 260－263
- 藤本かおる (2012) 「web 会議システムを使った遠隔対面授業での教室活動についての考察－日本・インド、日本・台湾間の初級日本語ブレンディッド・ラーニングの授業分析から－」『日本語研究』32 p. 177－190
- 藤本かおる (2011) 「遠隔教育における初級日本語教育での web 会議システムの利用とその考察－インドとの遠隔対面授業と日本国内の対面授業の比較を中心に－」『JeLA 会誌』11 p. 12－17
- 藤本かおる (2009) 「ブレンディッド・ラーニングにおける学習者の教材コンテンツ利用の観察と考察：東京・台北間での初級日本語遠隔授業から」『日本語研究』29号 pp. 37－50,
- 藤本かおる (2008) 「ブレンディッド・ラーニングによる遠隔日本語教育の実施と検証：東京・台北間での初級日本語授業から」『日本教育工学会研究報告集』08 (1) pp. 21－26
- 藤本かおる・武田聡子・長崎清美 (2011) 「受け入れ現場の要望を反映した日本語作文添削ブレンディッド・ラーニングの構築と実践」『日本教育工学会研究報告集』2 p. 43－46,
- 別府大学 (2012) 「学生による評価アンケート2012」配布資料
- 宮地功・安達一寿・内田実・片瀬拓弥・川場隆・高岡詠子・立田ルミ・成瀬喜則・原島秀人・藤代昇丈・藤本義博・山本洋雄・吉田幸二 (2009) 『e ラーニングからブレンディッドラーニングへ』共立出版
- Josh Bersin (2004) *The Blended Learning Book: Best Practices, Proven Methodologies, and Lessons Learned*. San Francisco: Pfeiffer. (邦訳 ジョシシュ・バーシン (2006) 『ブレンディッドラーニングの戦略』東京電機大学出版局)